

現在に至るまでの経緯を教えてください。

そもそも京大に行こうと思ったのは、地元的なことから離れようとしたというのがあります。高校で真面目な話をしようと思って、抽象的なことを言ったりするところからかわれたりして。友達とは仲良くやってましたけど、そういうところはずっと居てはいけな気がしました。高校は大阪だけど、大した進学校ではなかったの、ある種の「田舎」的なところがあり、そういうところを離れて京大に行くんだ、と思っていました。

高2まではほとんど勉強らしい勉強はしていませんでしたが、受験勉強を始めると楽しくなってきました。現役のときは落ちて浪人して、予備校に行っただけですが、そこで予備校講師に惹かれました。昔ほど破天荒な人はいませんが、ちょっとアウトロー的な雰囲気のある人や、研究者崩れみたいな人もいました。挑発的な発言や知的な批判などが新鮮で面白かったです。「これくらいは大学生になるんだっつら読まなきゃだめだ」、なんて教養主義的な雑談もあり、そこで大学や学問、教養といったものに対する憧れも生まれてきました。現在進めている受験文化をめぐる研究も、こうした原体験が

もとになっています。

経済学部には何も考えずに入っただけで、塾講師の仕事などをしていっているうちに、教育をちゃんと勉強したいと思うようになりました。京大生で自分の学歴に対する評価や待遇を当然視する人たちがいて、そのことに対して、それはお前らの親に金や学歴があっただけじゃないの、という疑問が湧いてきて、そういうところから教育格差の問題に関心を持ったこともあって、教育学部に移りました。

そこから大学院へ進学されたんですね

最初は予備校講師にでもなろうかなと思ってたところもあるんですが、予備校でこの人賢いな、って思っすぎて好きだった現代文の先生が京大の修士課程を中退していて、知的な予備校講師になるには、まず研究者を目指さなければいけないんだと思っていました。「研究者か研究者崩れの予備校講師になりたい」って昔は思っていました(笑)。

ただお世話になった講師の人たちには、「こんな俺ら日陰者やねんぞ」、「こんな仕事わざわざ目指すもんちゃうわ。せつかく京大行ったんやからちゃんと頑張れみたいなこと言われて。でもそれも当時

はかつこよく見えたんですね。どこか哀愁が漂う一方で、自分たちは

受験指導のプロではあるという自負も感じるというか。そういう暗さに惹かれたところもあります。

学校の教師とは折り合いが悪く、学制的なものに対する反発みたいなものがありました。こっちから突っかかっていって、「あかんもんはあかん」に決まってるやろって言われて揉める、みたいな。でも、それはたぶん、ちゃんと議論して欲しかったんですよね。ちゃんと突き詰めて考えていきたいという気持ちがあった、その時に大人が子どもをあしらうような対応してくるのが気に入らなかつた。予備校講師は学校くさいこと言わないんですよ。だけど学校の教師より学識があるっていうのがすごくかっこよく見えました。学校とのコントラストで予備校に惹かれたというのがあります。

大学院が就職かずっと悩んでいて、途中までは就活をして内定が出た企業に行くつもりだったんですが、卒論書いてたら楽しくなってきたのと、先生がとてつもなく来て、自分は研究者としてやっていけるかもしれない、という欲が出ました。ただ、能力的にも不安もあったので、踏み切って良いのかなと迷っていた記憶があります

す。いけるかな、勝負に出たいのかな、って。でも指導教員の先生が

「絶対大丈夫だから来なさいよ」みたいに言ってくれて。それだけ言うてもらえたこと自体が、認めてもらったみたいで嬉しかったし、安心感もありました。「飛べ」、「大丈夫だから」って言われて、大学院に進学することを決めました。

もともと本を書きたいっていう欲があったんですね。自分の名前を入れて、それを残したいという気持ちがある。それと、興味のあるテーマや、自分のできることなどが上手く重なったので、研究者の道を選ぶことにしました。

研究と予備校の両立は大変じゃないですか。

仕事の内容が研究テーマとかなり近いのと、英語を教えること自体が自分の勉強にもなっている、比較的前向きにはやれていると思います。あと、予備校は単純に給料がいいんですよね。そういう意味でも離れられなくなりました。

あなたにとってはたらくとは

少なくとも現時点ではやりたいことである研究がお金を生み出さないの、仕方なく自分の持っている中で金になるスキルを売っている

シリーズ

はたらく若者

第7回



終身雇用制度は崩壊し、働き方が大きく変化している今日。一人ひとりで見ると、よくある話かもしれませんが、でも複数回を並べてみると、そのはたらく姿から現代の若者のすがたがあぶり出されるのではないか。「はたらく」から若者の今を見つめます。

藤村達也(27)
京都大学教育学研究科博士課程/
予備校講師

ます。予備校の仕事は時間とスキルの切り売りだという意識を持ってやっています。ただ将来的な、理想的なあり方としては、そのやりたいことはたらくこと、仕事が重なるように生きていきたいし、一生やる価値のあるものをやりたいと思っています。

研究と予備校の仕事の二本柱だというのは、ポジティブに言えば両立していると言えるけれど、ネガティブに言えば分裂しちゃっています。一般論としては、仕事とやりたいことを結びつけるというのは、必ずしも良いこととは限りません。それでなくても良いと思っます。ただ自分のこととなると、やりたいことを仕事にしたいという気持ちがあります。関心が狭いということでもあるんですけど、自分が経験してきたことを研究していきたい。そういう意味で、現状では自分自身も浪人生みたいなものだと思います。研究一本で食っていけるようになるための助走期間ですね。